

二〇二六年度

南山中学校女子部 入学試験問題

国語

【注意】

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。試験開始まで、この【注意】をよく読んでください。
- 二、試験時間は五〇分です。
- 三、解答用紙の受験番号、名前は最初に記入してください。
- 四、この問題冊子は二三ページで、問題は【一】～【三】です。
- 五、試験開始の合図後、問題冊子や解答用紙に印刷が悪くて見にくいところや汚れよじなどのある場合は、だまって手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。
- 六、答えはすべて解答用紙に書き、記号で答えるものはすべて記号で答えなさい。字数制限のある問題は、句読点（「、」と「。」）や記号も一字として答えなさい。
- 七、本文中の*印の語句には、本文の後に注がついています。
- 八、試験終了しゅうりょう後は解答用紙のみを提出し、問題冊子は持ち帰ってください。

このページには問題はありません。

このページには問題はありません。

【一】次の文章は、臨床心理士（心理的な問題の解決のため、助言・相談などを行うカウンセリングの専門家）であり、大学の教員でもある筆者が、二〇二〇年の一年間、「心」をテーマにしたエッセイを雑誌に連載したときのことについて書いたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

人と人が会えなくなり、一緒に居られなくなった。つながりが失われ、それぞれの場所に隔離された。そして、それでもつながるために、私たちはオンラインに頼った。

*コロナ禍で心はどうなってしまったのか。心は何を失い、何を失わなかったのか。私はそういうことを無我夢中で書き綴っていた。

しかし、ネタはすぐに尽きた。5話書いたところで薄々気がつきはじめ、10話書いた段階で完全に自覚した。もう書くことがない。まだ夏になったばかりの頃だった。

もちろん、それでも締め切りはやってくる。なにがしかは書かれねばならぬ。だから、もはやコロナと関係なくともいい。とにかく心に関わるなにがしかを毎週毎週ひねり出さねばならぬ。

心はつらいよ。連載のタイトル通りだった。

心理学には本当にたくさん論文や本があつて、理論や知識はあふれている。それなのに、どのテーマも現代の読者たちに響くようには到底思えなかった。この時代に切実な心の話とはなんなのか。まるでわからなかったのだ。

ヒントが欲しくて、新聞を読んだり、テレビを見たり、*SNSを巡回したりもした。だけど、そこにあったのは、政治とか経済とかのとても大きく大きな話ばかりで、心を描くための小さなエッセイで扱えるようなことではなかった。

おかしい。心が見つからない。心はどこへ消えた？

心を探し続ける日が続いた。

チーズは冷蔵庫の下段で見つかった。だけど、心は冷凍庫の中にも、ソファの下にも、クローゼットの奥にも見当たらない。*ク

ラウドストレージの隅々まで検索してみたけど、やっぱり、ない。いくら探しても、ない。

苦しいその場しのぎを続けた。それも限界があった。だから、ある日とうとう腹をくくった。

これだけ探しているのにないのだ。そもそも存在していなかったに違いない。俺のせいじゃない。そうだ、もう心はないのだ。

①。すると、心を見失って迷子になっていた思考が、少しだけ前に進む。

なすべきは、「コロナ禍の心」を書くことではなかったのだ。問題は②。

心はどこへ消えた？

これこそが本当に書かれるべきテーマだったのだ。

そういうことがわかってきたときには、もう連載は後半に差し掛かっていた。季節は秋から冬へと移ろうとしていた。

「ちょっと待ってくれ。心が消えたって、いったい何を言っているのだ？」

当然のことながら、そういうツツコミが入ることだろう。

もっともな疑問だ。あなたは昨晚不安を感じていたかもしれないし、今朝は比較的気分がよかったかもしれない。今はこの本を読みながら、「ちょっと待ってくれ」と思ってる。それらはすべて心の働きだから、そういう意味では心は確かに存在する。消えていない。

それでも私は「心は消えた」と言いたい。

どうということだろうか。

〈※〉私たちは「パンデミック」の1年を過ごした。

Pandemic、それはギリシャ語のPan（すべて）とDemos（人々）をくっつけた言葉だ。字義通りに取るならば「みんな」という意味になる。しかも、厳密な意味での「みんな」だ。ありとあらゆる人々に関係するということなのだ。

だとすると、パンデミックとは「大きすぎる物語」のことになる。

2020年の私たちは大きすぎる物語に振り回されることになった。

世界中が同じウイルスに襲われ、同じ不安におびえ、同じ脅威に立ち向かった。みんながみんな、同じ物語に取り巻かれた。

たとえば、毎日発表される感染者数はその好例だ。数字が大きくなれば悪で、小さくなれば善。それはアンパンマンよりもシンプルな物語で、そしてシンプルであるがゆえに強力な物語になった。

大昔の人々が、焼いた亀の甲羅に刻まれた曲線から③シイを読みとり、コミュニティの舵取りを決めたのと同じだ。私たちは感染者数のグラフ曲線から、社会の舵取りを決めることになった。

暴風が吹いた。④が変化して、グラフの角度が変わるたびに、社会は一変し、みんなが同じ行動をとることになった。

私たちは一斉に自粛して、一律にお金を配られた。すべての学校が休校になり、すべての飲食店が8時に閉まった。みんな同じようにマスクをして、みんなトイレトペーパーの買いだめに走った。そして、大挙してワクチンを打ちに押し寄せた。

大きすぎる物語は、私たちを「みんな」へと束ね上げる。そのとき、個人は群れの一員として扱われ、心一つにするよう求められる。

社会を防御するためにはしやうがなかった。生命を守るためには必要なことだった。それはわかる。大きすぎる物語には有無を言わせないだけの説得力がある。

だけど、そのとき、小さな物語たちが吹き飛ばされてしまったのもまた事実だ。グラフに表れる数値を一つ一つ分解していくなれば、そこには小さな物語たちがあって、それこそが私たちの人生の単位だったはずなのに。

同僚二人と飲み会に繰り出して全員感染する。それはグラフ上、「3」という数字にしかない。

だけど、そこには本当は小さな物語がある。彼らにはリスクがあるとわかっているけど、飲みみにかざるをえない複雑な事情があったはずだし、感染したことで家庭や職場では複雑な*顛末が生じたはずだ。そういうところこそ、私たちの心の物語がある。

しかし、大きすぎる物語は、小さな物語を想像することをとつともなく難しくする。

⑤正論に異常なほどの強い力が宿るから、例外とか個々の事情とか、そういう弱々しい声で語るしかない物語たちは一掃いっそうされてしまうのだ。

みんなの心を⑥ a 一つにしようとするならば、⑥ b 一つ一つの心はかき消されてしまう。

心とは何か。

連載を書き進めるに従い、私は次第しだいにそういう根本的な問題を考えるようになった。

すると、これまで自分が「心とは何か」をきちんと考えたことがなかったことに気がつく。普段心理士として心を扱う仕事をし、大学教員として心についての講義をしているというのに。

わからないことがあったときは、まずは事典を引いて、定義を確認する。昔そう習ったし、学生にもそう教えているから、私も図書館に行つて、心理学の専門的な事典を調べてみることにした。

すると、驚おどろくべきことがわかった。心理学の事典にはそもそも「心」という項目こうもくが存在していなかったのだ。図書館に置いてあった事典をすべて見てみる。「A」どこにも「心」がない。おかしい。心はどこへ消えた？

ふしぎなことだ。宗教学事典には「宗教」の項目がある。文化人類学事典には「文化」の項目がある。当然だ。学問は基本、対象とするものをきちんと定義してから出発する。それなのに、心理学事典には「心」の項目がない。心についてきちんと考えたことのない心理学者は私だけではなかったのかもしれない。

だけど、ただ一つだけ、書棚しよだなの片隅かたすみに置かれていた古ぼけた小さな事典にだけ、「心」の項目があった。そこにあったのはたった一行だけの短い定義。

体・物の反対。

笑つてしまう。これじゃ何も言っていないのと同じじゃないか。

すぐに思いなおす。いや、笑えないんじゃないか。

体・物の反対。つまり、心は体でもなく、物でもないものことである。

⑦心が否定形で定義されている。これは深遠な洞察なのではないか。

ここがこの本でもっとも理屈っぽいところになる。少しハードだと思いが、ついてきてほしい。

たとえば、頭がひどく痛いとき、あなたはまず病院に行くはずだ。そこで、脳の写真を撮り、血液の検査をする。その結果、「体には異常はない」と診断される。そのとき初めて、あなたはその頭痛の原因が心にあるのではないかと考え始める。

あるいは、カウンセリングを受ける時だってそうだ。カウンセリングは何か困ったことがあったとき、最初に選ばれる場所ではない。クライエント（相談者）たちはまず自分の問題を自分でなんとかしようとする。体調が悪いせいではないかと思ひ、休みを取り、生活習慣を変えてみる。環境が悪いせいじゃないかと思ひ、引っ越ししたり、転職したりするかもしれない。あるいは霊のせいだといって、お祓いに行ったりする人もいるかもしれない。

それでもどうにもならなかったとき、「心の問題」が可能性として浮かび上がってくる。そうやってようやく、渋々カウンセリングの予約を取ることになる。

そう、心は否定の後に現れる。体のせいでもなく、物のせいでもない。お金がないせいでもなく、組織が悪いともいえない。社会だけのせいにも、環境だけのせいにもできそうにない。そういうときに、心を問題にせざるをえなくなる。

あるいは、こうも言える。みんなが言っていることに納得がいかない。親にも同僚にもパートナーにもわかってもらえない。きわめて個別の、自分にしかわからない事情がある。そういう他者とは異なる自分だけの孤独に、心が宿る。

心とはごくごく個人的で、内面的で、*プライベートなものだ。それはあらゆるものを否定した後にも残されるものなのだ。心は旅の始まりではなく、終わりに見つかる。

だから、小さな物語こそが、心の場所になる。⑧物事をシンプルに割り切ろうとする大きな物語を否定したところに心が現れるのだ。

そうじゃないか。

私たちは複雑な話を、複雑なままに聴き続けたときに、その人の心を感じる。あるいは複雑な事情を複雑なままに理解してもらえたときに、心を理解されたと感じる。表だけではなく、裏まで含めてわかってもらうと、心をわかってもらえたと思える。

〈中略〉

大きすぎる物語は心をかき消す。それは抗しがたい。

それでも、私たちは心をもう一度見つけることもできる。小さすぎる物語が完全に消失してしまうことはないからだ。

それでも個人は存在する。それぞれの複雑な事情は存在する。

私はそういうものを取り扱う仕事をしている。

この1年、コロナの最中でも、私はカウンセリングの仕事をし続けていた。

東京の片隅にある小さな*雑居ビルの、そのまた小さな一室でクライアントと会い続けてきた。

来談が難しくなっていてオンラインになったクライアントもいたし、対面で通い続けたクライアントもいた。

いずれにせよ、⑨私たちは心について話し合うことを続けたのだ。

そのとき語り合われたのは、大きすぎる物語ではなかった。コロナのことや、政府のことや、*グローバル資本のことではなかった。「B」、そういう大きすぎる物語も彼らの小さすぎる物語の遠景にはあった。

だけど、結局のところ、クライアントたちが語り続けたのは身の回りの小さな人間関係のことであり、彼らが置かれているきわめて個別の複雑な事情であった。

カウンセリングルームでは、大きすぎる物語に抗して小さすぎる物語が語られる。表ではできない裏の話がなされる。誰にもわかってもらえない気がしない自分だけの孤独が、小さな声で語られる。

心は頻繁にかき消される。それをもう一度見つけ出す。だがそれもつかの間再び心は失われる。それでも、何度も何度も心を再発見し続ける。そのために、私たちは話し合いを続ける。

だから、心理士として言わねばならぬ。

それでも、心は存在する。

どこに？

*エピソードの中に。

クライエントの語る小さすぎる物語の中の、これまた小さすぎるエピソードに、彼や彼女の心が立ち現れる。ときにほのやかに、ときにあざやかに。

心とは何か。それは事典で定義されるものではない。心は⑩aの言葉で語られた途端に、灰色の標本になってしまう。大きな物語の中では心は窒息ちっせきしてしまう。

そうではない。心とはごくごく個人的で、内面的で、プライベートなものだ。だから、心は具体的で、個別的で、カラフルなエピソードに宿る。緑なす⑩b的断片こそが、心の棲家すまかなのだ。

(東畑開人『心はどこへ消えた?』より。問題作成の都合上、一部に省略や改変をしたところがあります。)

*コロナ禍……新型コロナウイルスが招いた災難や危機的状況しよくききょう。具体的には二〇一九年末から続いたものを指す。

*SNS……インターネット上でのコミュニティのサービス。参加者はプロフィールを公開し、文章や写真を投稿・掲載とうこうし、情報交換けいさくや交流などを行う。

*クラウドストレージ……インターネットを通してデジタルデータを保存できる場所。

*顛末……事の初めから終わりまでの経過。

*プライベート……個人にかかわること。私的。

*雑居ビル……多数の業種により、各種の目的で使用されるビル。

*グローバル資本……世界的規模に拡大した資本のこと。資本とは、工場、機械、原材料など、生産手段のもととなるものこと。

*エピソード……本筋とは直接関係のない小さな話。

問一 「A」・「B」に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A けれども B とはいえ イ A やつぱり B むしろ
ウ A たしかに B もちろん エ A けれども B むしろ
オ A やつぱり B もちろん

問二 ①に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 開き直る イ さじを投げる ウ とぼける エ 手のひらを返す オ 図に乗る

問三 ②に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 心を見失っていた自分だったのだ イ 心が消えた場所そのものだ
ウ エッセイの長さにあったのだ エ 自分の探し方にあったのだ
オ 心が存在しないことそのものだ

問四 ③「シンイ」の「シン」と同じ漢字を書くものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア シン身_レをきたえる イ 意味シン長 ウ シン_レ仏の加護 エ 温故知シン オ シン_レ念が固い

問五 ④に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 季節 イ ウイルス ウ 物語 エ 数字 オ 舵取り

問六 —— 線⑤「正論」は、ここでは具体的にどういう理屈にもとづいたものですか。本文中からそれにあたる部分を四〇字以内で探し、最初の五字を答えなさい。

問七 —— 線⑥ a 「一つ・」 —— 線⑥ b 「一つ一つの」は、それぞれの言葉に置きかえることができますか。「一つ・」一つの「と同様の意味を持つ言葉を、本文中の「※」以降 —— 線⑥までの部分から、それぞれ三字以内でぬき出しなさい。
ただし、「どちらにも」「」という字をぶくまない言葉を答えること。

問八 —— 線⑦「心が否定形で定義されている。これは深遠な洞察なのではないか。」とありますが、筆者は「心」の定義から、「心」とはどのようなものだと捉えるようになったのですか。「否定」という言葉を用いずに、六五字以上七〇字以内で説明しなさい。

問九 —— 線⑧「物事をシンプルに割り切ろうとする」とありますが、「シンプルに割り切る」とはどういうことですか。「シンプル」と反対の意味を持つ言葉を本文中から探し、その言葉を用いて一五字以上二〇字以内で説明しなさい。

問十 —— 線⑨「私たちは心について話し合うことを続けたのだ」とありますが、それは何のためですか。次の中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 専門家の心理士でなければわからない裏側の話をするため。
- イ 世界中の人々と同じ大きな物語に取り巻かれて生きるため。
- ウ コロナ禍においても仕事をして生活に必要な収入を得るため。

エ 心をかき消す大きすぎる物語に抵抗して心を見つめるため。
オ それぞれの場所に隔離されて生きる人々の孤独を癒やすため。

問十一 ⑩ a ・ ⑩ b に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ⑩ a ㄱ ア エッセイ イ 理論 ウ オンライン エ 雑誌
⑩ b ㄱ ア 文学 イ 政治 ウ 科学 エ 道徳

問十二 本文全体の論述の構成を説明したものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 心について書こうとしたことで問題が自分のせいではないとわかったことを述べ、次に、問題がみんなに共通のものであることを説明し、さらに、その問題を誰も考えなかった事情を考察して、最後に、心理士の社会的役割を紹介している。
イ 心の問題を書こうとしたけれど問題を発見できなかった日々のつらさを述べ、次に、社会によって問題がかき消されていくことを説明し、さらに、その問題のありかについて検討して、最後に、話し合いを続ける意義へと話題を広げている。
ウ 心の問題を書こうとしたけれど問題は心にはないことが明らかになったいきさつを述べ、次に、問題の本当のありかを考察し、そのうえで問題の根本的な原因について検討して、最後に、自分の職業上の経験をふまえて課題を整理している。
エ 心について書こうとしたことで問題のありかが明らかになったいきさつを述べ、次に、その問題が生じた社会的背景を説明し、さらに、より根本的な問題について考察して、最後に、自分の仕事との関係にもとづいて課題をまとめている。
オ 心について書こうとしたことで問題がエッセイでは扱いづらいものとわかったことを述べ、次に、問題の背景が大きすぎることを説明し、そのうえで、問題が生じた原因を考察して、最後に、心理士の仕事のやりがいについて確認している。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

物語の舞台は大阪の夜間中学（様々な理由で中学校の教育を受けなかった人を対象とする学校）である。中学一年生で不登校になった潤間さやかは、二〇歳を超えてから夜間中学に通い始めた。同級生には戦争で孤児になった遠見、ベトナム人のスアンなどがある。

三階の一番奥の教室。

廊下の窓から覗くと、まだ授業の最中だった。国語の担任だろう、黒板にチョークで文字を書いている。一年一組は識字クラス、即ち、日本語を読むこと、書けることを可能にするためのカリキュラムが組まれている、と聞いていた。

スアンの他に、*ニューカマーと思われる生徒が数人。しかし、圧倒的に多いのが白髪交じりの年配者たちだった。

『あ』『お』『ぞ』『ら』これで『あおぞら』と読みます。はい、一文字ずつ、声に出して読んでみましょう」

「あ・お・ぞ・ら」

教師に言われて、生徒たちが声を揃える。

『あ』いう字いは、ほんまに難しいねえ、先生」

『お』かて、たいがいやわ」

『ら』なんか、釣り針にしか見えんがな」

高齢の生徒たちが口々に訴えている。

えっ、ときやかはA固唾を呑み込む。強烈な違和感があった。

「そうですね、五十音の中でも、『あ』は手強いです」

教師はプリントを配りながら、けれど、と慰める口調で続ける。

『あべの』『あびこ』『あしはら』『あじがわ』等々、皆さんに馴染のある地名にも使われてますからね。しつかり覚えておきましょう」

点と点をつなげば、「あ」という字になるよう工夫されたプリントなのだろう。生徒たちは背を丸め、鉛筆の芯を舐め舐め、懸命に書き取りを始めた。

「平仮名さえ、こないに難しいんやで。漢字を読んだり書いたり出来るようになるんは、一体、何時のことやろか」「寿命があるんかねえ」

あちこちで、①切ない嘆きが洩れ聞こえた。

何で？ どうして？

スアンのようなニューカマーならともかく、普通の大阪のおっちゃん、おばちゃんが、何で今更、「あおぞら」なん？ほんまに字い、読まれへんの？ 書かれへんの？ ほんまに？

違和感の正体は、そんな疑問だった。

「潤間さん」

背後から呼ばれて、肩をぽん、と叩かれた。驚いて振り向くと、担任の江口が立っていた。

「識字クラスの授業を見るのは、初めて？」

問われて、さやかは深く頷く。そして江口先生に、教室の窓際に座る老女をそつと指し示した。

八十路近い女性が、一心不乱にプリントの「あ」という文字をなぞっている。

「あのひと……あの生徒さんは、私の祖母と同一年くらいやと思います。けど、字が読めへんて……書けへんて……」

あとは言葉にならず、B言い淀む。

戦争や貧困や病などで学校に行けなかった——そういう事情は見聞きして、充分に知っているつもりだった。けれど、まさか……。

② 声を失し、棒立ちになるさやかに、教諭は、

「これが、現実なんよ」

と、平らかに告げた。

教室では、生徒たちが各々、プリントと格闘している。その授業風景に目を向けたまま、江口先生は声を落として、こう続ける。

「文字を読めない、書けない——そのことが、あのひとたちに、どれほどの過酷な人生を強いたのか。考えてみてね」

あ・お・ぞ・ら

あ・お・ぞ・ら

再び、音読の声が廊下まで流れてきた。

「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。憲法二十六条では、このように」

社会科の教科書を、担当教師の田宮がゆつくりと読み上げている。

二年三組の生徒たちは、教科書を目で追い、時々小さな声で唱和しつつ、「教育を受ける権利」について学んでいく。

あ・お・ぞ・ら

耳の奥には、先刻の識字クラスの生徒たちの声がこびりついて、消えることがない。さやかは教科書から視線を外し、そっと周囲を見回した。

* 中国残留孤児だった菫子、* 在日の正子 * ハルモニ、ほかにも戦禍や貧しさのため、学齢期に学校に行けなかったひとたち。

今、当たり前のように机を並べているけれど、皆、識字から……あそこからスタートしたのだろうか。

国語、英語、数学、社会、理科。

中学で学ぶ五教科全てを、識字から始めて身に付けようとするなら、どれほどの根気と努力が要ることか。

それでも学びたい、と思うのは何故だろう。その熱意は何処から生まれるのか。考えても、考えても、さやかにはわからなかった。

「先生、今日もありがとうございます」

「はい、お疲れさま。気を付けて帰ってくださいね」

午後九時過ぎ、無事に授業を終え、夜間中学の生徒たちは、疲れながらも晴れやかな顔つきで校門を出ていく。

そのまま夜勤の仕事に向かう者も居れば、家路につく者も居る。さやかは、遠見と正子ハルモニ、車椅子の介助者とで駅へと向かっていった。

「そうか、江口先生とそないな話をなあ」

吐息交じりに、遠見は呟く。

何処となく元気がないさやかを気遣い、遠見から何かあったか、と問われた。思い切ってスアンを迎えにいった先で見た光景、江口先生との遣り取りを打ち明けたさやかであった。

「わしも正子ハルモニも、識字から始めたよって、そらあ、大変やった。最初に教わったんが『つ』『く』『し』やったから、まだ何とかなった。けれど、あれが『あ』やったら、とうにくじけてるやろ」

なあ、正子ハルモニ、と同意を求めて、遠見は切なげに瞬きをした。

「中国残留孤児やった落子さんは、それでも十歳までは日本語の教育を受けてはったよって、進級も早かったけど、わしは……」
ゼロから始めてここまで来るのに六年かかった、と苦しげに遠見は話す。

「私は七年。七年かかったんよ」

柔らかに、正子ハルモニが口を開いた。

「それでも奇跡に近い、と思える。何せ、読むことも書くことも、どっちも全く敵わなかったんやからねえ」

正子ハルモニの言葉に、車椅子を押していた介助者が深く頷いていた。

飲食店、ドラッグストア、金融業、コンビニエンスストア、等々。駅周辺の繁華街には、電飾で縁取られた看板が林立し、文字が洪水のように押し寄せる。

「こんなに文字が氾濫してるのに……」

読めなかったら。

書けなかったら。

そんなん、想像も出来へん、という台詞を、さやかはぐつと呑み込んだ。

皆の歩みが自然に、遅くなる。

ポケットに、と遠見が自分の上着のポケットに手を入れてみせた。

「ポケットに、いっつも包帯を入れてたんや」

「包帯を？ 何で？」

さやかに問われて、遠見は気弱な笑みを浮かべる。

「仕事場でも役場でも何処でも、何かを『書け』と言われてそうになると、手えに怪我した振りして、誰ぞに代わりに書いてもらうためやがな」

遠見がポケットから手を出した。その掌に、丸められた包帯が見えるようだった。

私は、と正子ハルモニが声を低める。

「私は眼鏡やった。よう眼鏡を忘れた振りをしたんよ。代わりに読んでもらうためにねえ」

——③これが、現実なんよ

江口先生の言葉が、その表情が脳裡にありありと蘇る。

——文字を読めない、書けない。そのことが、あのひとたちに、どれほどの過酷な人生を強いたのか
もしも、字が読めへんかったら……

書けへんかったら……

それが私やったら……

足もどが、大きくぐらりと崩れるような錯覚に襲われて、さやかは両の足を踏ん張った。そうしなければ、立ってはいられなかった。

駅の改札前で遠見と別れ、車椅子の正子ハルモニと介助者と一緒に、プラットホームに向かう。さやかは押し黙ったままだった。何か用事を思い出したのだろう、介助者がホーム端の公衆電話を指して、

「ちよつと電話をかけてきます。少しだけ待つてもらえますか」と断ってから、車椅子を離れた。

ラッシュアワーを過ぎたホームは静かで、次の電車を待つひとも、まばらだった。さやかは車椅子のハンドルに手を添えて、正子の隣りに立っていた。

駅名標、路線図、駅構内図、「終日禁煙」を始めとする標識、行先案内、等々。駅のホームには、大切な情報を記した表示が一杯あった。

もしも、一文字も読めないとしたら……。

蒸し暑い夜のはずが、背筋がぞくぞくと寒く、④さやかは身震いをした。

さやかちゃん、と正子ハルモニは傍らのさやかを見上げる。

「朝鮮から無理やり日本に連れて来られた時、私は十二歳やったんよ」

母国語のハンゲルの読み書きさえ、充分に出来なかった。

*女工から始めて、働きに働いてねえ、と正子ハルモニは自身の手に視線を落とす。変形した指の関節、節が高く、長年の苦勞が刻まれた手だった。

さやかは相手の目の高さよりも低くなるよう、車椅子の傍らに腰を落とした。

正子ハルモニは、淡々と続ける。

「読み書きを覚えたくても、『お前に字いなんぞ要らん。働け』と。皆、そない言うてねえ。一遍も学校へ行かせてもらわれへんかった」

戦争が終わって、縁あって結婚し、家族にも恵まれた。

「字を知らんでも、生きてはいける。けどねえ、子どもの通信簿もよう読んでやれんかったんよ。娘の不思議そうな、悲しそうな顔は、何十年経ったかて、忘れられへん」

当時を思い出すのか、老女の声が⑤湿りけを帯びていた。

「文字を知らんから、何遍も騙されて。家も財産も全部、持っていかれたこともあったわ」

今なら相談する窓口もあるだろうが、当時は泣き寝入りするほかなかったのだという。

「そんな……ひどい……」

かける言葉も見つからず、さやかは声を失するよりなかった。

友の受けた理不尽を我が身に置き換え、俯くばかりのさやかに、正子ハルモニは⑥そっと手を差し伸べる。

「せやけどねえ、さやかちゃん」

友の皺だらけの手が、さやかの手をそっと掴んだ。

⑦夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはだけへんの」

正子ハルモニの一言に、さやかは不意を突かれる。

ホームに、電車が到着する合図の音楽が流れて来た。

「お待たせして済みません」

詫びながら、介助者が車椅子に駆け寄る。

「ほな、さやかちゃん、お休み。また明日、学校でね」

掌にぐつと力を込めてから、正子ハルモニは、さやかの手を放した。

介助者と車椅子の同級生が乗車した電車が、ホームを滑り出る。遠ざかって闇に紛れたあとも、さやかはホームに佇んでいた。友の温もりが、握る手に込められた力が、まださやかの掌に残る。

学校はおろか、文字さえも与えられなかった正子ハルモニ。

何もかも与えられながら、それを当然としか思わなかった自分。

——夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはだけへんの

あ・お・ぞ・ら

正子ハルモニの言葉に、識字クラスの授業風景が重なる。

ああ、とさやかは思う。

⑧ああ、そうか、と。

『学び』とは、誰にも奪われないものを自分の中に蓄える、ということなのか。

誰のためでもない、自分のために。

自分の人生のために。

「強いなあ、強いわ、ほんまに」

思わず、声に出していた。

それに比べて、自分は何と「あかんたれ」なんやろか。

血を吐く思いで自身の中に蓄えたものなど、何一つないように思う。全て、当然のものとして受け取ってきた。

強くありたい。強くなりたい。

正子ハルモニの感触が宿る掌を、さやかはぐつと拳に握りしめていた。

(高田郁『星の教室』より。問題作成の都合上、一部に省略や改変をしたところがあります。)

*ニューカマー……海外から日本に来たばかりの外国人。

*中国残留孤児……第二次世界大戦終結時に中国東北部に取り残され、中国人に育てられた日本人の子。

*在日……ここでは日本の植民地時代に朝鮮半島から日本に移り住んだ人々を指す。

*ハルモニ……朝鮮語で「おばあさん」「おばあちゃん」を意味する語。

*女工……工場で働く若い女性の呼び名。

問一 ——線A・——線Bとほぼ同じ意味の言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 「固唾を呑み込む」

ア 息をこらす

イ のどが鳴る

ウ 頭をかかえる

エ 足がすくむ

オ しり込みする

B 「言い淀む」

ア 口をつぐむ

イ 口を尖^{とが}らせる

ウ 口ごもる

エ 口走る

オ 口出しする

問二 ——線①「切ない嘆き」とありますが、これはどのような気持ちでしょうか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記

号で答えなさい。

ア いつまでたっても不自由なく読み書きができるようにならず寿命が来てしまうとあせる気持ち。

イ 生きているあいだに不自由なく読み書きができるようにはならないかもしれないと悲しむ気持ち。

ウ 努力を重ねても不自由なく読み書きができるようになる日は来ないという現実に落ち込む気持ち。

エ 不自由なく読み書きができるようになるだけの力を持つことができないうちに腹を立てる気持ち。

オ 不自由なく読み書きができるようになるまで生きることができないうちに学ぶことをあきらめる気持ち。

問三 ———線②「声を失し、棒立ちになる」とありますが、さやかはどのようなことに驚いたのでしょうか。最も適切なものを

次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の祖母と同じ年くらいの女性と外国人が、同じ空間で熱心に学習していること。
- イ 想像していたよりもはるかに多くの人々が、学びの機会を奪われ苦しんでいたこと。
- ウ 学ぶ機会を奪われた人が、普通に暮らせるようになるまで大変な思いをしてきたこと。
- エ 戦争や貧困や病が、これほど多くの人々から学ぶ機会を奪うものであったということ。
- オ 日本で普通に暮らしているように見える高齢者が、ひらがなすら読めないということ。

問四 ———線③「これが、現実なんよ」とさやかは江口先生の言葉を思い出し出していますが、遠見と正子ハルモニは「現実」のな

かでのような状況じょうきょうだったでしょうか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 文字の読み書きができず周囲の人を頼ることが申し訳ないと思うような状況。
- イ 文字の読み書きができない自分のことを受容しなければならぬような状況。
- ウ 文字の読み書きができないことを周囲の人々に隠かくさざるをえないような状況。
- エ 文字の読み書きができない自分のことを否定しなければならぬような状況。
- オ 文字の読み書きができなくても平気なふりをせずにはいらぬような状況。

問五 ———線④「さやかは身震いをした」とありますが、それはなぜでしょうか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これほど文字にあふれている世の中でもし自分が一文字も読み書きができなかったらと考えると、今までの自分の世界が崩れていくようで恐ろしくなったから。

イ 今は当たり前のようににもに学んでいる二人の過酷な人生を知り、自分が周囲の人々の持つ苦しみにどれほど無関心だったのかとはずかしくなったから。

ウ 江口先生の言葉や識字クラスの生徒の様子を思い出し、この先ひらがなが読めるようになって、どれほど困難な人生が続くのだろうと気の毒になったから。

エ 「教育を受ける権利」があると知られながらそれを奪われ困難を強いられていた人々の存在を知り、人々を守るはずの法や社会の弱さを不安に思ったから。

オ 読み書きできなかったころのつらさを打ち明けてくれたのに、自分はその状況を想像することすらできず、話してくれた二人に申し訳なくなつたから。

問六 ———線⑤「湿りけを帯びていた」とありますが、これはどのような声になったことを示しているでしょうか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 苦しみに耐^たえる声 イ 涙^{なみだ}でむせかえる声 ウ 暗く落ちこんだ声

エ 消え入りそうな声 オ 昔をなつかしむ声

問七 ———線⑥「そつと手を差し伸べる」とありますが、これには正子ハルモニのどのような気持ちが表れているでしょうか。

最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 正子ハルモニの経験と自身の経験を重ねて気落ちしたさやかを励ましたいという気持ち。
- イ 正子ハルモニの受けた理不尽に心を痛め同情しているさやかの優しさに感謝する気持ち。
- ウ 正子ハルモニの苦しみを聞いてつらい過去を思い出したさやかを助けたいという気持ち。
- エ 正子ハルモニの人生の過酷さを想像し自分のことのように心を痛めたさやかを思いやる気持ち。
- オ 正子ハルモニの困難な状況にもし自分がなっていたらと恐怖を覚えるさやかに寄り添う気持ち。

問八 ———線⑦「夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはでけへんの」とありますが、正子ハルモニにとって文字とはどのようなものでしょうか。彼女の人生をふまえて四五字以上五五字以内で説明しなさい。

問九 ———線⑧「ああ、そうか」とありますが、これはさやかが抱いた疑問から答えに思い至ったことを示す言葉です。その疑問として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア もし自分が彼らのように一文字も読み書きできなかったらどうするだろうかという疑問。
- イ 年齢を重ねてから学びはじめた人たちに、どれほどの根気があるのだろうかという疑問。
- ウ 目標達成が困難であることをわかっていても学ぼうと思うのはなぜだろうかという疑問。
- エ 普通に暮らしている人々が、どうしていまさらひらがなを学ぶのだろうかという疑問。
- オ 正子ハルモニの言った「文字は奪われない」とはどのような意味だろうかという疑問。

問十

——線の「あ・お・ぞ・ら」について、最初に一年一組の教室で聞いた「あ・お・ぞ・ら」と、この場面の「あ・お・ぞ・ら」とではさやかへの受け止め方はどのように変化したのでしょうか。それを説明した次の文の [a]、[b] に適切な言葉を補いなさい。ただし、次の指示に従うこと。

- ・ [a] については、本文中から三字の言葉をぬき出して答えなさい。なお、二か所の [a] には同じ言葉が入ります。
- ・ [b] については、学ぶことにふれながら二〇字以上二五字以内で答えなさい。

最初に一年一組の教室で聞いたときは、目の前の現実が信じられず、その光景に [a] を覚えていたが、正子ハルモニの言葉をを受けて彼らの [b] に気付いたことで、「あ・お・ぞ・ら」の声 [a] なく響いている。

【三】 次の各文の——線のカタカナを、漢字に改めなさい。(とめ・はね・はらいもふくめて、一字一字ていねいに書きなさい。)

- ① 彼の意見とは一線をカクする。
- ② 地位を悪用してシフクを肥やす。
- ③ 方針を一八〇度テンカイする。
- ④ 港町の情感を文章にウツす。
- ⑤ デンカの宝刀を抜く時が来た。
- ⑥ 姉の成績はクラスのヒットウだ。

このページには問題はありません。